

須玖式土器の再検討

田崎, 博之

<https://doi.org/10.15017/2230683>

出版情報 : 史淵. 122, pp.167-202, 1985-03-31. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

須玖式土器の再検討

田 崎 博 之

はじめに

北部九州地方の弥生時代中期の土器は、従来、鋤形口縁をもつ甕形土器・朝顔形にひろがる口頸部をもつ広口の壺形土器・口縁部が袋状になった細頸の壺形土器などに代表され、「須玖式土器」と呼ばれてきた¹⁾。また、その中に時間的な変差が認められるものとして、中期土器の編年的研究が進められてきている。まず、森貞次郎氏による²⁾期区分がある。森氏は一九四〇年に弥生時代の土器編年をⅠ～Ⅺ式に分け、このうちⅣ～Ⅵ式を中期とし、一九六四年の段階でもこの考え方が踏襲されている³⁾。つまり、前期土器とともに袋状竪穴などから出土する例があり、形状的にも前期土器にちかい一群を城ノ越式、中期でも典型的で中頃に比定される須玖式、御床松原遺跡の資料をもとに、後期土器に似た要素をもつ御床式として編年している。これに対して、杉原莊介氏も、福岡県城ノ越遺跡の発掘調査の成果から、中期土器を二分して、Ⅱ様式土器とⅢ様式土器とし、各々A・Bに細分した³⁾。しかし、城ノ越遺跡が、以後の弥生文化研究の中心となった福岡平野などから地域的にはずれていたこと、城ノ越遺跡が河川の氾濫原に二次的に堆積した遺物包含層であるとの疑問などから、森氏編年が中期土器の編年の基調となってきた。その後、小田富士雄氏

は、中期の前半にあたる須玖Ⅰ式、後半にあたる須玖Ⅱ式、さらに、中期土器の成立を重視する立場から、中期初頭にあたる城ノ越式土器を設定した。^①最近では、発掘調査現場での経験をもとにして、中期土器を「初頭、前葉（前半）、中葉（中頃）、後葉（後半）、末」あるいは「初頭、前半でも古い段階、前半でも新しい段階、後半でも古い段階、後半でも新しい段階」といった編年感をもつ研究者が多い。しかし、これはあくまでも経験にもとづいたものであり、各研究者間には微妙な考えの差違があり、また充分な型式学的操作が施されているわけではない。その中で、福岡県小都市周辺の資料を用いた片岡宏二氏の中期土器の編年研究は、その整理の意味では評価すべきものではある。^②このほか、橋口達也氏は、成人用大形甕棺を編年し、それに併行する日常用土器の編年を試みている。^③また、近年、北部九州地方でも東半部（遠賀川流域から旧豊前国にわたる一帯）の土器資料が増加しつつあり、それまで福岡平野を中心として地域で組み立てられてきた土器編年では、充分に理解できないものが含まれることが明らかになってきている。^④

北部九州地方の弥生時代中期の土器編年は、あくまでも経験的につみあげられ、その後に概念化（？）がついてきた感が強い。編年の方法としても、遺構出土の「良好な一括遺物」と呼ばれる土器群をえらび、遺構の切り合い関係をもとに羅列し、その間の形状的あるいは製作手法の差違をみつけるといった方法が用いられることが多い。しかし、この方法では、どれだけの「一括遺物」を得られるかが編年案作成の鍵であり、限られた器種のみが編年の俎上にあるだけの場合があり、極端な場合には一遺構＝一様式（型式）の設定もみうけられる。また、編年図をみても一つ一つの型式差が明らかでない場合もあり、認めたいものが含まれている例もある。こうしたことが起こるのは、土器の型式あるいは系譜関係が十分に整理されていないためである。一つ一つの土器型式の再検討、系譜関係の把握する作業が必要である。そうした作業をおこなうなかで、北部九州地方内部の土器の地域色の抽出がすすみ、それを基礎とした地域間の交流・関係が分析でき、土器からみた、より具体的な弥生時代・社会の復元も可能となると考える。

本稿では、須玖式土器と呼ばれてきた北部九州の中期土器を対象として、型式分類を行い、それらがどのように遺構から出土するかによって型式組列を決定し、また、空間的なひろがりも含めて系譜関係を整理しながら、中期土器の編年を組み立てる考え方を再検討する。

一

北部九州地方の弥生時代前期末〜後期初頭と従来考えてこられた土器の中で、出土量が最も多く、どのような遺跡でも出土しているものとして、器高30〜40センチメートル前後の甕形土器がある。これは、外面に煤が厚く付着するものが多く、煮炊きに用いられた土器である。そこで、こうした甕形土器について考えてみたい。これらの甕形土器で最も目につく分類要素は、口縁部の形状である。該期の甕形土器を口縁部の形状から次の4つの系譜にまとめてみた。

A系譜——弥生時代前期の如意形口縁部をもつ甕形土器から系譜がたどれるもので、如意形あるいは「く」字形に口縁部を折りかえす甕形土器群。

B系譜——口縁部に粘土帯を貼付して、断面三角形、「コ」字形あるいは鋤形につくりあげた口縁部をもつ甕形土器群。

C系譜——A系譜と同様に「く」字形の口縁部をもつが、A系譜の甕形土器とくらべ、胴部・底部の形状、分布が異なる甕形土器群。

D系譜——形状的にはB系譜の範疇に含まれるが、外面に丹塗り磨研を施し、精撰された粘土を用い、精美なつくりの鋤形口縁部をもつ甕形土器群。

これら該期の4系譜の甕形土器は、形状・底部のつくり方を細かくみると、各系譜ごとに細分が可能である。以下、

甕形土器の断面形を图示した第1図〜第4図を参照しながら各系譜ごとに型式分類を行ってみた。

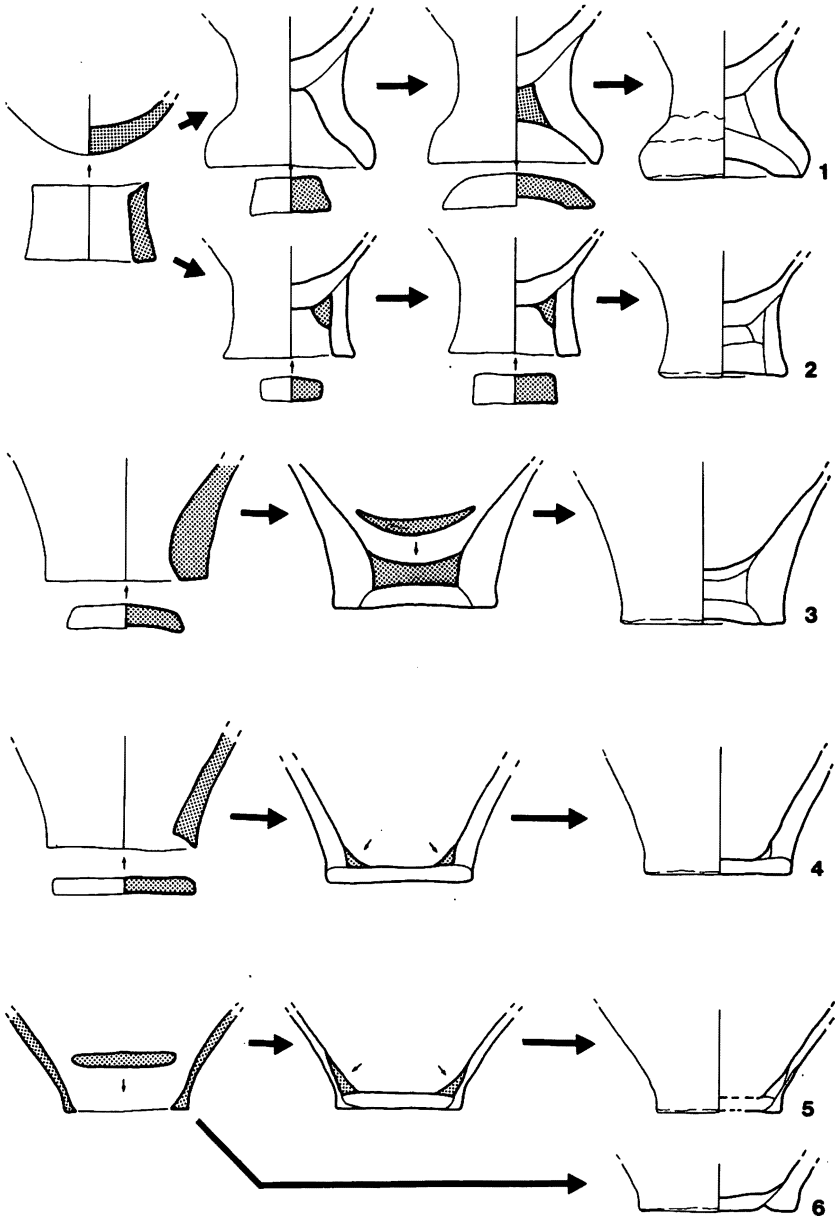
① A系譜の甕形土器(第1・2図)

この系譜の甕形土器は、口縁部・胴部・底部の形状と底部の成形手法から、厚い上げ底で如意形口縁部をもつ一群(第1図1・2)、同じく厚い上げ底で逆L字形あるいは「く」字形に屈折する口縁部をもつ一群(第1図3・10)、薄めの底部をもち口縁端面に細い粘土紐を貼付して所謂跳上口縁に仕上げた一群(第1図11・19)とに大別できる。さらに、細かい特徴から、A系譜の甕形土器を、後述のようにA₁〜A₇の計7つの型式に細分する。

A₁(第1図1・2)——口縁部は弥生時代前期の甕形土器にみられる如意形で、口縁内面の屈曲部にうすい稜線がつく。底部は裾部がふんばり、厚い上げ底である。破片からうかがえる底部の製作過程は、すでに高倉洋彰氏が言及しているように、まず、丸底につくられた胴部下半部に円筒状の高台が接合される。空隙に粘土をつめ、外底部分の全面に粘土を貼付して厚い上げ底に仕上げる(第3図1)。また、胴上半部と円筒状の高台を接合し、空隙に円盤状の粘土塊を何回かに分けて充填して、厚い底部につくり上げたものもみられる(第3図2)。ここで、前者のような甕形土器の底部を製作する手法を「底部a手法」、後者の手法を「底部b手法」と呼ぶ。

A₂(第1図3・5)「く」字形に近く屈曲する如意形口縁部をもつが、A₁の底裾部がふんばり気味あるのに対して、底部側面がゆるやかに内湾する張り出し気味の底裾部をもつ。胴部はわずかに張り、無花果の実にちかいプローションを呈する。底部の製作過程をみると、「底部b手法」でつくられたものが多い。

A₃(第1図6・8)——如意形口縁が屈曲度をましたかたちの「く」字形あるいは逆L字形の口縁部をもつ。A₁・A₂の甕形土器とくらべ、胴上半部がほとんどすばまらず、口縁部へとつながり、全体として腰高の砲弾形のプローションを呈する。底部は厚く若干上げ底のものと、薄で前期甕形土器の底部に近い上げ底のもの(第11図10)とがある。前者は「底部b手法」でつくられることが多い。口縁部の断面形状をみると、数は少ないが一部



第3図 底部形成過程の想定図 (1. a手法：岐宿貝塚、2. b手法：垂水廃寺、3. c手法：板付遺跡、4. d手法：比恵遺跡、5・6. e手法：比恵遺跡)

のものに、口縁端面を強く横ナデして跳上口縁状に仕上げるものがある(第2図8)。こうしたものは、前述のA₂に分類される甕形土器の中にも少量みられる。また、胴上半部に突帯あるいは沈線をめぐらすものがある。突帯の場合、三角形の断面形ものがほとんどで、A₁のものとかくベシャープに仕上げられている。

A₄(第1図9・10)——いずれも「く」字形口縁部をもち、胴上半部がすばまり、A₃とくらべると胴部がやや張っている。口縁端面を強く横ナデして跳上口縁状に仕上げるものが多い(第2図9)。また、胴上半部に断面三角形の突帯あるいは沈線をめぐらすものがあるが、A₃とくらべ口縁部により近い部位にめぐらす。A₄の甕形土器は底部の形状からは2つに分けることができる。一つは、「底部b手法」でつくられたやや厚底のもの、他は、粘土円盤の上に胴部下半部にあたる部分を円筒状につくり、その後、内底全面に粘土を一回ないし二回充填して底部を完成させるものである(第3図3)。後者の底部成形の手法を「底部c手法」と呼ぶ。こうした底部の成形手法の差違から、A₃の中で底部の形状には厚底のものやや薄手のものにと、細分が可能であると思えるが、口縁部・胴部の形状といった他の分類要素が、A₁、A₃あるいは後述するA₅、A₇のように対応することがないので、ここではA₄として一括した。

A₅(第1図11・12)——A₄とくらべ、胴部の張りが目立つが、胴部最大径より小さいが、胴下半部もふくらみ、口径とくらべ器高の割合が小さく、全体に丸みをおびている。口縁部は「く」字形に強く屈折し、口縁内面を強く横ナデして跳上口縁状に仕上げたもののほかに、口縁端面に細い粘土紐を貼付して跳上口縁に仕上げたものがある(第2図12)。前者とくらべ、後者の出現頻度がかなり高い。また、器高が50センチメートルをうわまわる大形の甕形土器には、口縁端部を肥厚させてクサビ形の口縁断面形をもつものもみられる。胴上半部には沈線をめぐらすことはなく、ほとんどが断面三角形の突帯を口縁屈折部近くにめぐらす。底部の製作過程のわかる破片をみると、「底部c手法」のほかに、底部にあたる粘土円盤に、胴下半部にあたる粘土帯を接合し、内底部分に補

強の粘土を貼付して、薄めの底部をつくり上げるものがある(第3図4)。A⁵は後者の手法で底部をつくるものがほとんどで、この手法を「底部d手法」と呼ぶ。

A₆(第1図13~16)——A₁、A₄が口径とくらべ器高が高く細身のプロポーションを呈するのに対して、A₆は胴部最大径が口径と等しいか、わずかにうわまわる。底部はA₁、A₅にみられた底裾部の張り出しが小さい。また、跳上口縁は、口縁端面内に細い粘土紐を貼付してつくられたものがほとんどである。

A₇(第1図17~19)——A₆とくらべ、胴部最大径が口径を完全にうわまわり、胴部の丸みがつよい。口縁部もたち上がり、口縁端面内に細い粘土紐を貼付して仕上げる跳上口縁は内側に傾くものがみられる。底裾部がわずかに張り出す特徴も、側辺がわずかに凹む程度である。なかには、不安定な平底のものがあり、弥生時代後期中頃の甕形土器にみられる凸レンズ状底部への移行をうかがわせる。

② B系譜の甕形土器(第1・2図)

この系譜の甕形土器群も、A系譜のものと同様に、口縁部・胴部・底部の形状、底部の成形手法から、厚い上げ底で断面三角形あるいは「コ」字形の口縁部がつく一群(第1図20~27)、薄めの底部で鋤形口縁部をもつ一群(第1図28~34)に大別される。両者はさらに細かい特徴によって、各々3グループに細別でき、B系譜の甕形土器はB₁、B₆の6つの型式に分類できる。

B₁(第1図20・21)——口縁部は断面三角形あるいは「コ」字形を呈し、胴部はほとんど張らず、厚い上げ底がつく。口縁端部には小さめの刻み目がヘラ状工具・ハケメ原体の木口部で施されることが多い。この甕形土器群の大きな特徴は底部の裾部が張り出しふんばったかたちをとることで、製作過程が観察できる底部破片をみると、「底部a手法」と「底部b手法」でつくられており、特に前者の手法が多用されている。また、胴上半部に断面三角形突帯を一条めぐらす例もあり、口縁端部と同じく刻み目を入れている。突帯のかわりに沈線をめぐらす例も

あるが、その出現頻度は低い。

B₂ (第1図22～24) —— この甕形土器の一群はB₁のものと同じく、口縁部断面形が三角形あるいは「コ」字形を呈する。B₁とくらべ、胴上半部がすぼみ、口径より胴部最大径がうわまわり、腰の高い厚底がつく。底部は「底部b手法」でつくられたと考えられるものが多く、B₁の底部のように、底裾部が張り出すことはない。胴上半部に断面三角形の突帯をめぐらすものがあるが、B₁とくらべやや大きくシャープである。沈線をめぐらす例は少ない。また、口縁端部に刻み目を施す例が、少量であるが知られている。

B₃ (第1図25～27) —— 口縁部に長めの「コ」字形の粘土帯を貼付して逆L字形の断面形に仕上げたものや、さらに口縁部内面に粘土帯を貼付して鋤形の断面形に仕上げたものがある。いずれも、口縁部は内側に傾く。胴部はB₂とくらべふくらまず、底部はやや薄めにつくられる。こうした底部は「底部c手法」によりつくられている。

胴上半部に断面三角形突帯をめぐらす例があるが、B₁・B₂とくらべると、突帯の貼付位置は口縁部に近い。

B₄ (第1図28・29) —— B₄以下B₅・B₆の、底部は、「底部d手法」でつくられるもののほかに、胴下半部にあたる円筒形の中に、底部にあたる粘土円盤を内側から接合するものの二者が混在している。特に、後者の手法は、後述するB₅・B₆の甕形土器に多く用いられているようである。ここでは、仮りに後者の手法を「底部e手法」と呼ぶこととする。B₄・B₅・B₆は口縁部・胴部プロポジションをみると、いくつかの差違が指摘できる。B₄については、口縁部が断面鋤形をなすが、口縁部が内側に傾いており、胴部がふくらみ、B₃に近い形状をなす。

B₅ (第1図30・31) —— B₄と同じく、口縁部の断面形は鋤形であるが、口縁部がほぼ水平につくられ、胴部はほとんど張らずに砲弾形のプロポジションをもつ。胴上半部にめぐらされる突帯は断面三角形のものが多く、B₃とくらべ口縁部に近い部位に貼付される。

B₆ (第1図32～34) —— 胴部がほとんど張らず、砲弾形の形状をなし、鋤形口縁部が外側に傾く特徴をもつ甕形土

器の一群である。

③ C系譜の甕形土器 (第4図)

この系譜の甕形土器群は、「底部d手法」か「底部e手法」でつくられている。しかし、口縁部と胴部の形状からは $C_1 \cdot C_2 \cdot C_3$ の3つの型式に分類できる。

C_1 (第4図1・2) —— 口縁部は屈曲が著しく、 A_3 (第1図6・8) に近い逆L字形の断面形をなす。胴部はあまり張らず、口縁部内面に粘土帯を付け加えると B_4 (第1図28・29) に非常に近い形状を呈する。

C_2 (第4図3・4) —— C_1 とくらべ、口縁部がたち上がり、口縁部内面に不明瞭な稜線をもって屈折する「く」字形口縁である。 C_1 とくらべ胴部がはり、胴部最大径が口径に近いが、うわまわることはない。

C_3 (第4図5・7) —— 内面に明瞭な稜線をもって「く」字形に屈折する口縁部をもち、胴部は C_2 とくらべふくらみ、胴部最大径が口径をうわまわり、 $C_1 \cdot C_2$ とくらべ丸みをもつ。なかには、底部が不安定な平底をなし、後期中頃の甕形土器の凸レンズ状底への移行をうかがえる。

④ D系譜の甕形土器 (第4図)

$A \sim C$ の系譜の甕形土器は、胴部外面に煤が付着している例が多く、主に煮炊き用として使用されたものと考えられる。これに対して、D系譜の甕形土器は、外面を丹塗り磨研し、胎土にも精撰された粘土を用いた精美なつくりの甕形土器である。形状的には、鋤形口縁部をもち、B系譜の範疇に含まれるが、前述のような土器自体の問題と、竪穴住居跡などの生活遺構より、小児用甕棺に用いられたり、祭祀と関連すると思われる遺構からの出土例が圧倒的に多いことから、B系譜から分離して考えた。 $A \sim C$ 系譜の甕形土器と同様に、形状の面から $D_1 \sim D_6$ の6つの型式に分類できるが、「底部d手法」か「底部e手法」でつくられ、口縁部下と胴部に断面M字形あるいは三角形の突帯をめぐらすことが多い。

- D₁ (第4図8) —— 鋤形口縁部がほぼ水平につくられ、胴部はほとんど張らず砲弾形のプロポーションを呈する。
- D₂ (第4図9・11) —— 鋤形口縁部がわずかに外傾し、D₁とくらべ胴部がやや張る。前述のD₁とあわせ、B系譜のB₅・B₆の甕形土器に近似している。
- D₃ (第4図12・13) —— 鋤形口縁部が外側に傾き、胴部最大径が口径よりわずかに小さく、底部側面が内湾しながら胴下半部へ移行するために、全体に丸みをおびたプロポーションを呈する。また、D₁・D₂とくらべ、D₃および後述するD₄・D₆は口径に対する底径が大きく、ふくらみのある胴部プロポーションとあわせ、安定感がある。
- D₄ (第4図14・15) —— 鋤形口縁部が外傾し、胴部最大径が口径とほぼ等しいか、わずかにうわまわる。底部側面は、わずかに内湾あるいはほぼ直線的に胴下半部へと移行する。
- D₅ (第4図16・17) —— 胴部から底部のプロポーション・形状はD₃と同様であるが、D₃の口縁部が外傾する鋤形口縁部であるのに対して、D₅はわずかに内傾する鋤形口縁部をもつ。
- D₆ (第4図18・19) —— 胴部の形状はD₄と同様であるが、D₅と同じく内側に傾く鋤形口縁部をもつ。また、一部には外底面がわずかにふくらみ、不安定な平底となったものが含まれる。

二

弥生時代中期とされてきた器高30〜40センチメートル前後の甕形土器群をA〜Dの4つの系譜に大別して、各々の系譜ごとに型式分類をおこなった。次に、これら甕形土器の型式の組列・先後関係を考えてみたい。

型式の組列を決める基本は当然、同時に一括して埋没、埋納された「一括遺物」と呼ばれる資料群である。しかし、良好な一括遺物と考えられる例は、それほど多くないのが現実である。その中で、日常用の甕形土器・壺形土器を転

用して組み合わせて営まれた小児用甕形棺墓は、恰好の土器資料を提供してくれる。ここで、小児用甕形棺墓に用いられた土器は、あくまでも埋葬遺跡の資料であり、それにより組み立てられた編年は竪穴式住居跡などの集落遺跡出土の資料に適応できるかとの疑問がある。確かに、D系譜の甕形土器が埋葬遺跡からの出土例がほとんどで、土器自体も外面を丹塗り研磨するなど特殊なものである。しかし、AとCの系譜の甕形土器が小児用甕形棺に転用をされていても、外面には煤が付着し、時として胴下半部内面に煮焦げらしい炭化物が認められることなど、土器の使用痕跡からは集落遺跡で出土するものと異なるものではない。また、小児用甕形棺墓が弥生時代中期の北部九州地方で特殊な葬制ではないことも、小児用甕形棺に用いられた土器が集落遺跡での資料と対応させて考えうる一つの根拠である。むしろ、従来、土器資料の型式分類・系譜関係の整理があいまいであり、数量的に多く各種の系譜をひく土器が混在する集落遺跡出土の資料を的確に分析できていなかったために、こうした疑問がもたれていたのではないだろうか。この点、小児用甕形棺の資料は、二ないし三個体が検討の対象であり、より単純なかたちで資料を操作できる利点をもつ。本稿では、小児用甕形棺墓の資料を用い、前述した甕形土器の各系譜の型式がどのように組み合っているかを検討し、型式組列の決定をおこなう。その後、集落遺跡などの良好な資料で、それを補足したい。

まず、A系譜の甕形土器を小児用甕形棺墓に転用した代表的な例をみることにする(第5図)。A₁に関しては、小児用甕形棺に用いた例を一例しか知りえなかった。第5図1は行橋市前田山遺跡1地区24号甕形棺である。上棺の甕形土器は如意形口縁部をもち、腰高の厚い上げ底で、底裾部が外側に張り出す特徴をもち、A₁に分類される。下棺の甕形土器は、逆し字形に近く屈曲する口縁部をもち、やや胴部がはったプロポジションで、厚いやや上げ底状の底部がつき、A₂に分類される。北九州市馬場山遺跡24号甕形棺は下棺にA₂を用い、上棺には薄めの底部ではあるが、胴部がほとんど張らないA₃に分類できる甕形土器を用いる(第5図2)。3は福岡県嘉穂郡穂波町スタレ遺跡4号甕形棺であるが、上下棺ともにひずみが著しいものの、逆し字形に強く屈折して、あまり胴部の張らない甕形土器が用いられている。

底部はそれほど厚くはないが、全体の形状の特徴からいうと、A³の範疇に含まれるものである。次に嘉穂郡穂波町日上遺跡では小児用甕棺墓が一基調査されている(第5図4)。上棺はスタレ遺跡4号甕棺の甕形土器と同じ形状の特徴をもち、A³に分類される。下棺の甕形土器は上棺のものとくらべ、底部が薄く、口縁部は「く」字形に屈折する。A⁴に分類できる。A³とA⁴の甕形土器を組み合わせて小児用甕棺に用いた例としては、他に行橋市下稗田遺跡I地区4号甕棺の例をあげることができ、A³に分類できる上棺は、厚い上げ底で底裾部が外側に張り出す特徴をもち、A³でも典型的な甕形土器である(第5図5)。次に、北九州市八幡西区馬場山遺跡2次調査23号甕棺墓には、上下棺ともに、A⁴に分類できる胴部がやや張る「く」字形口縁部をもつ甕形土器が用いられている(第5図6)。行橋市前田山遺跡I地区46号甕棺墓には、上下棺ともに、「底部d手法」で底部をつくり、胴部の張ったプロポーションで、「く」字形口縁部の端部内面に細い粘土紐を貼付して跳上口縁に仕上げた甕形土器が用いられている。A⁵に分類できる(第5図7)。同遺跡I地区41号甕棺墓では、上棺の甕形土器はやや細みの胴部プロポーションに「く」字形口縁部がつき、底裾部が外側に張り出し、A⁵に分類できるものである。これに対して、下棺の甕形土器は、器高にくらべ口径が大きく、胴部最大径が口径とくらべやや小さく、底裾部の張り出しが目立たず、全体として丸みをおびたもので、A⁶に分類できる(第5図8)。次に、前田山遺跡I地区43号甕棺墓は、上下棺ともに、口径と胴部最大径がほぼ等しく、口縁端内面に細い粘土紐を貼付して跳上口縁に仕上げた甕形土器である。また、底部は「底部d手法」でつくられ、底裾部の張り出しはなく、わずかに内湾しながら胴下半部へ移行する。A⁶に分類できる(第5図9)。立岩遺跡11号甕棺は、下棺の甕形土器が底部を欠くが、いずれも胴部最大径が口径をうわまわり、底裾部がわずかに内湾しながら胴下半部へ移行する。「く」字形口縁部は立ちあがり、端部内面に細い粘土紐を貼付してつくる跳上口縁は、内側にややたおれこんだような形状をなす。A⁷に分類できる(第5図11)。小児用甕棺のほかに、A系譜の甕形土器を含む良好な一括資料として、北九州市八幡西区馬場山遺跡1号袋状堅穴、福岡県鞍手郡鞍手町中屋敷遺跡第I地点4号堅穴、鞍手郡若宮町小原遺跡

第1号貯蔵穴の資料をあげることができる。そのうち、馬責場遺跡の資料は、A₄とA₅の甕形土器を主体としてD₂の甕形土器から構成され、後二者の資料はA₆とA₇の甕形土器から構成されている。

以上の資料を表にまとめたものが〈表1〉である。こうした小児用甕棺墓をはじめとする一括資料は、時間の切片をあらわしており、A₁が一定の時間幅をもって製作・使用されたと考え、縦軸を時間の流れとして〈表1〉を〈表2〉のように組みかえることができる。つまり、前田山遺跡I地区24号甕棺墓はA₁とA₂、馬場山遺跡24号甕棺はA₂とA₃、スダレ遺跡4号甕棺墓はA₃のみ、日上遺跡甕棺墓と下稗田遺跡I地区4号甕棺墓はA₃とA₄、馬場山遺跡2次調査23号甕棺墓はA₄のみ、前田山遺跡I地区46号甕棺墓はA₅のみ、立岩遺跡29号甕棺墓はA₅とA₆、前田山遺跡I地区43号甕棺墓はA₆のみ、立岩遺跡11号甕棺墓はA₇のみ、馬責場遺跡1号袋状竪穴は

〈表1〉 A系譜の甕形土器の遺構での組合関係

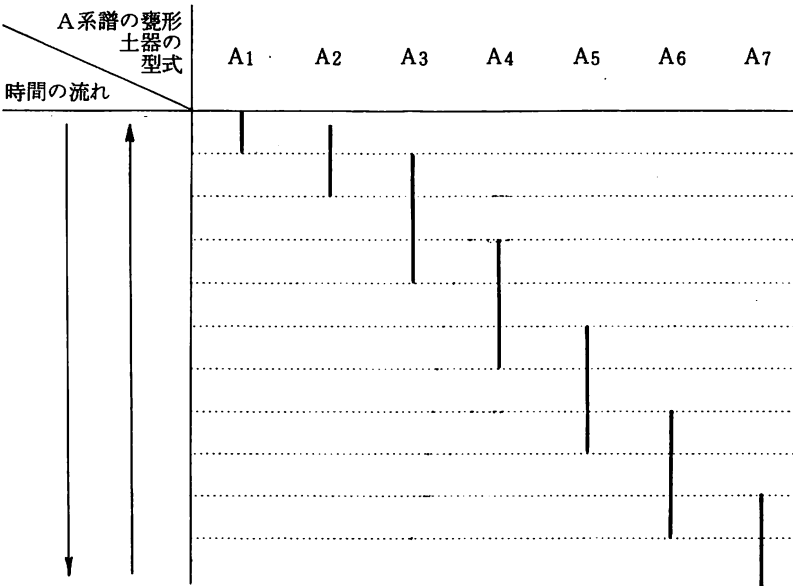
A系譜甕形土器の型式	A1	A2	A3	A4	A5	A6	A7
小児用甕棺の代表例							
前田山I地区24号甕棺墓	⊕	⊕					
馬場山遺跡24号甕棺		⊕	⊕				
スダレ遺跡4号甕棺墓			⊕ ⊕				
日上遺跡甕棺墓			⊕	⊕			
下稗田遺跡I地区4号甕棺墓			⊕	⊕			
馬場山遺跡2次調査23号甕棺墓				⊕ ⊕			
前田山遺跡I地区46号甕棺墓					⊕ ⊕		
前田山遺跡I地区41号甕棺墓					⊕	⊕	
前田山遺跡I地区43号甕棺墓						⊕ ⊕	
立岩遺跡11号甕棺墓							⊕ ⊕
馬責場遺跡1号袋状竪穴				○	○		
中屋敷遺跡第I地点4号竪穴						○	○
小原遺跡第1号貯蔵穴						○	○

(⊕・⊕は甕棺の上・下棺をあらわす。)

A₄とA₅、中屋敷遺跡第1地点4号竪穴と小原遺跡1号貯蔵穴はA₆とA₇が単純にあるいは同時併存して存在する時間の切片が示されている。以上から、A₁・A₂・A₃・A₄・A₅・A₆・A₇あるいは、A₁・A₂・A₃・A₄・A₅・A₆・A₇（以下、古↓新をあらわす）の型式組列が考えられる。また、A₁甕形土器は、弥生時代前期の甕形土器と組み合せて遺構から出する例があることからA₁↓A₂の変化が考えられ、A₇の甕形土器には、弥生時代後期の凸レンズ状底への移行がうかがえるものが含まれていることから、A₁↓A₂↓A₃↓A₄↓A₅↓A₆↓A₇という組列が決定できる。

次にB系譜の甕形土器について考えてみたい(第6図)。B₁に関しては小児甕棺に用いた例を知りえなかったが、B₂↓B₆については多くの資料があり、充分な検討をおこなえた。まず、福岡市博多区板付遺跡G-5a区28号甕棺には、上下棺ともに、厚い上げ底をもち、胴部が張り、口縁部断面がコ字形を呈し、B₂に分類される甕形土器が用い

〈表2〉



(ただし、時間の流れの中では上下どちらが古い時間帯をあらわすか決定できない。また、各型式の線の長さは時間の長さをあらわしていない。)

られている(第6図1)。次に同遺跡同区の25号甕棺には上棺にB₂に分類される甕形土器が用いられているが、下棺の甕形土器はやや薄めの底部で、胴部がはずらず、口縁部が内傾する鋤形口縁をもち、B₃に分類できる(第6図2)。また、同14号甕棺には、上下棺ともにB₃の甕形土器が用いられている(第6図3)。次に佐賀県鳥栖市安永田遺跡268区6トレンチ9号甕棺は、上下棺とも口縁部が内傾する鋤形口縁の甕形土器であるが、底部形状から、上棺は「底部c手法」、下棺は「底部d手法」でつくられていると考えられ、各々B₃とB₄の甕形土器に分類できる(第6図4)。春日市赤井手遺跡21号甕棺は、下棺には口縁部が水平につくられた鋤形口縁部をもつB₅の甕形土器、上棺には口縁部が内傾するB₃の甕形土器が用いられている(第6図5)。福岡市早良区西新町遺跡20号甕棺墓には、上下棺ともに、「底部d手法」でつくられた甕形土器であるが、上棺は内側に傾く鋤形口縁部を持ち、下棺はほぼ水平な鋤形口縁で、各々B₄とB₅の

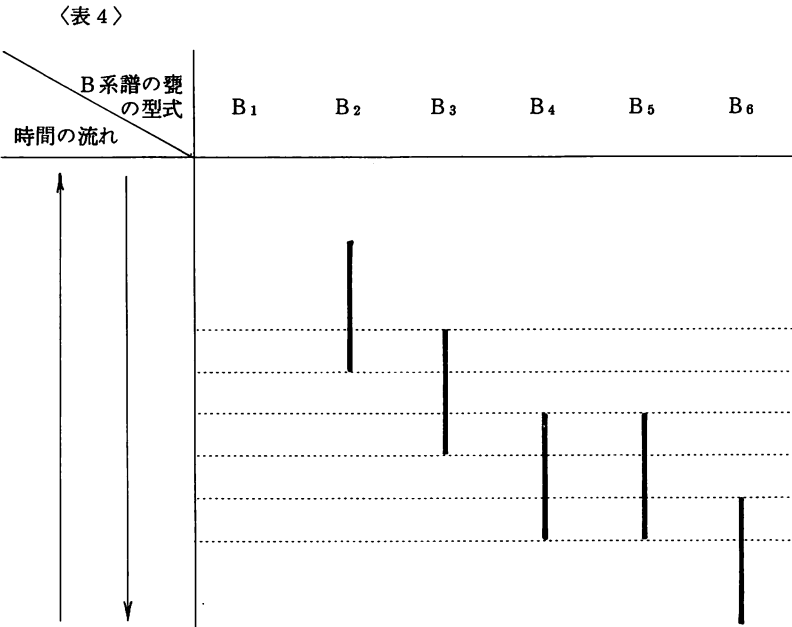
須玖式土器の再検討

〈表3〉 B系譜の甕形土器の遺構での組合関係

B系譜の甕形土器の 型式	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄	B ₅	B ₆
	小児用甕棺の代表例					
板付遺跡 G-5a 区28号甕棺墓		⊕⊕				
“ 25号甕棺墓		⊕	⊕			
“ 14号甕棺墓			⊕⊕			
安永田遺跡 268区6トレンチ9号甕棺墓			⊕	⊕		
赤井手遺跡 21号甕棺墓			⊕		⊕	
西新町遺跡 20号甕棺墓				⊕	⊕	
栗山遺跡 6号甕棺墓				⊕		⊕
原遺跡 101号甕棺墓					⊕⊕	
原遺跡 104号甕棺墓					⊕	⊕
藤崎遺跡 65号甕棺墓						⊕⊕

(⊕・⊕は上・下棺に用いられた甕形土器をあらわす。)

甕形土器に分類できる(第6図6)。^⑩ 甘木市栗山遺跡6号甕棺の甕形土器は、土器自体のひずみが著しいが、上棺は鋤形口縁部がわずかに内側に傾きB₄に、下棺は鋤形口縁部がやや外傾してB₆に分類される(第6図7)。^⑪ 春日市原遺跡101号甕棺は、上下棺ともに、ほぼ水平に仕上げられた鋤形口縁部をもち、形状から「底部d手法」でつくられたと考えられる甕形土器である。これらはB₅の甕形土器に分類できる(第6図8)。^⑫ また、同遺跡104号甕棺墓では、上棺には、鋤形口縁部がやや外側に傾くB₆に分類できる甕形土器、下棺にはほぼ水平に仕上げられた鋤形口縁部をもちB₅に分類できる甕形土器が用いられている(第6図9)。^⑬ 福岡市早良区藤崎遺跡65号甕棺墓の甕形土器は、上下棺ともに、鋤形口縁部が外側に傾き、砲弾形のプロポーション、「底部d手法」でつくられたと考えられる甕形土器で、B₆に分類できる。

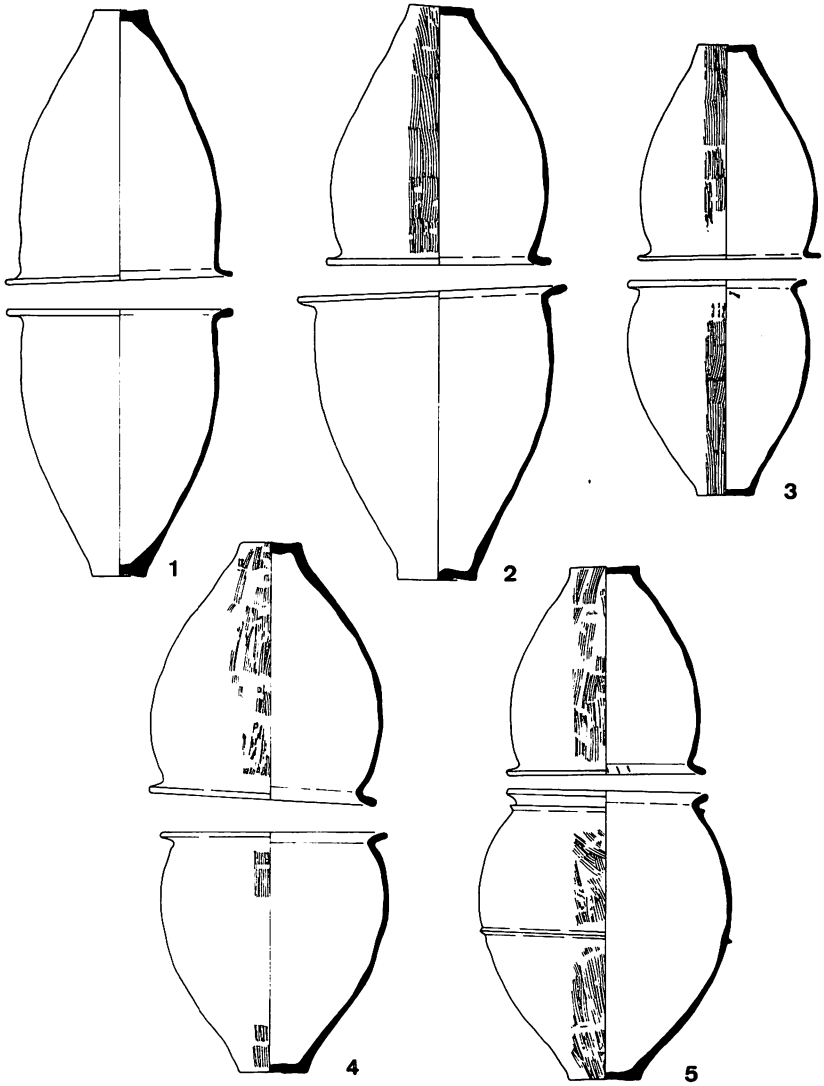


(ただし、時間の流れの中では上下どちらが古い時間帯をあらわすかは決定できない。また各型式の線の長さは時間の長さをあらわしていない。)

以上の小児用甕棺に用いられた甕形土器の組み合わせ関係を示したのが〈表3〉である。さらに、これをA系譜の甕形土器の型式組列決定を行ったように、縦軸に時間の流れをとって組みかえたものが〈表4〉で、これからは、 $B_2 \downarrow B_3 \downarrow (B_4 \cdot B_5) \downarrow B_6$ あるいは $B_6 \downarrow (B_5 \cdot B_4) \downarrow B_3 \downarrow B_2$ のいずれかの型式組列が考えられる。遺構での切り合い関係、 B_2 が弥生時代前期とされる亀ノ甲タイプの甕形土器に最も近いことから、 $B_2 \downarrow B_3 \downarrow (B_4 \cdot B_5) \downarrow B_6$ という型式組列が組み立てられる。 B_1 については、良好な一括資料がないが、福岡市早良区浄泉寺遺跡などをはじめ、袋状堅穴に廃棄された資料では、 B_2 とともに出土する例が多くあること、形状的にも B_2 と最も近いことから、 B_2 に先行する直前の型式と考えられる。²²⁾ また、 B_4 と B_5 については、同時に存在するが、数量的に B_4 が B_5 よりややに多いことから、次のような型式組列を考える。

$$B_1 \downarrow B_2 \downarrow B_3 \downarrow B_4 \downarrow B_5 \downarrow B_6$$

C系譜の甕形土器について検討したい(第7図)。まず、春日市赤井手遺跡22号甕棺墓は上下棺ともに、砲弾形の胴部をもち、口縁部が逆L字形に屈曲する甕形土器で、 C_1 に分類される(第7図1)。²³⁾ 筑紫野市道場山遺跡第1地点35号甕棺墓・春日市原遺跡126号甕棺墓では、 C_1 に分類される甕形土器と、 C_2 に分類される「く」字形口縁部をもち胴部のはった甕形土器が組み合っている(第7図2)。次に、筑紫野市平原遺跡4号甕棺墓・春日市原遺跡38号甕棺墓・佐賀県鳥栖市郊区1トレンチ3号甕棺墓などでは、 C_2 に分類される甕形土器が上下棺に用いられている(第7図3)。²⁴⁾ 安永出遺跡296区2トレンチ2号甕棺墓・同9号甕棺は、 C_2 の甕形土器と、 C_3 に分類される胴部最大径と等しいかあるいはうわまわるような胴部のはった甕形土器が組み合っている(第7図5)。安永田遺跡296区4トレンチ3号甕棺は、上下棺ともに、「く」字形口縁で、胴部最大径が口径をうわまわり、底裾がわずかに内湾しながら胴下半部へ移行する丸みをもつ C_3 の甕形土器が用いられている(第7図4)。こうした小児用甕棺の組み合わせ関係と、 C_3 の甕形土器の中に弥生



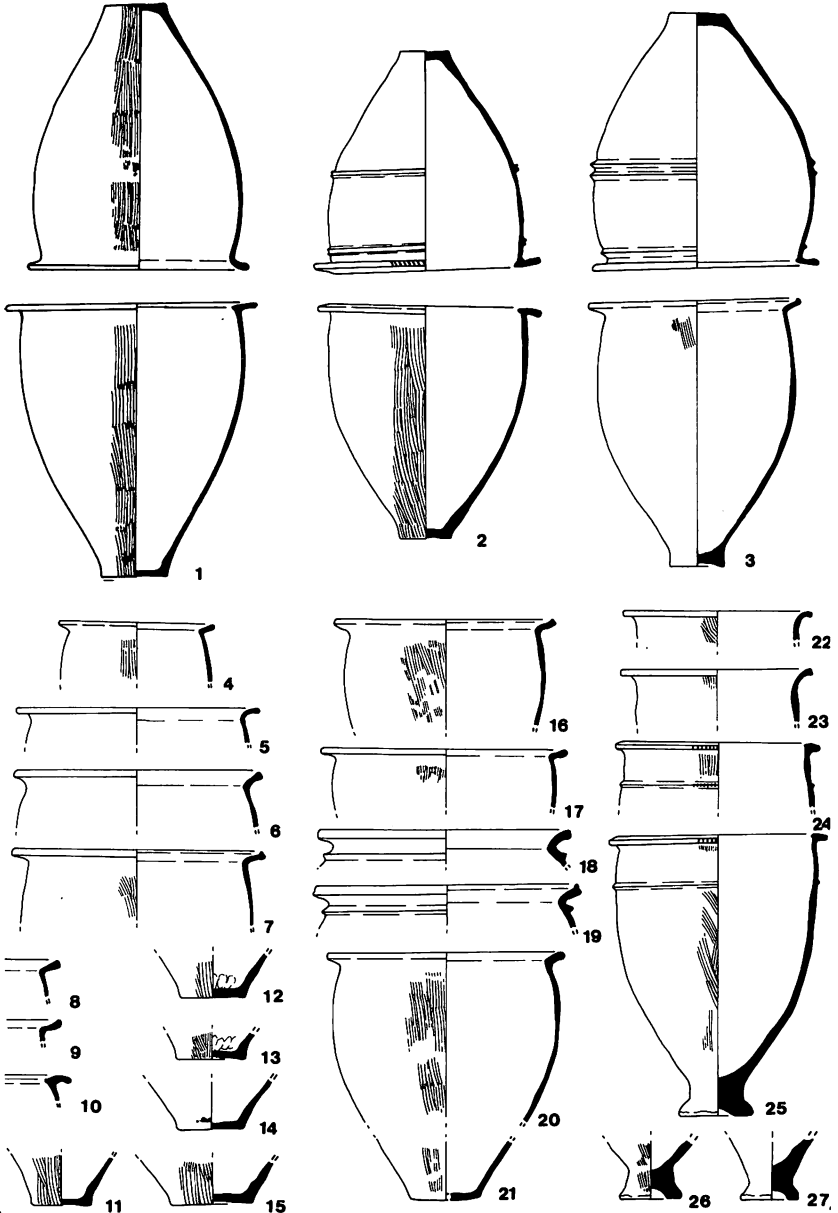
第7図 小児用襖棺に用いられたC系譜襖形土器の組合関係 縮尺 $\frac{1}{6}$
(1.赤井手K22、2.原K126、3.原K38、4.安永田296区4トレンチK3、
5.安永田296区2トレンチK2)

時代後期の凸レンズ底への移行がうかがえるものがあることから、A・B系譜の甕形土器の型式組列決定と同様に、C系譜の甕形土器についてもC₁↓C₂↓C₃(古↓新をあらわす)の変遷を考慮することができる。

D系譜の甕形土器については、A↪C系譜の甕形土器とくらべ出土例が少なく、この系譜のみの資料では型式組列を決定できない。これについては、次節でふれることにする。

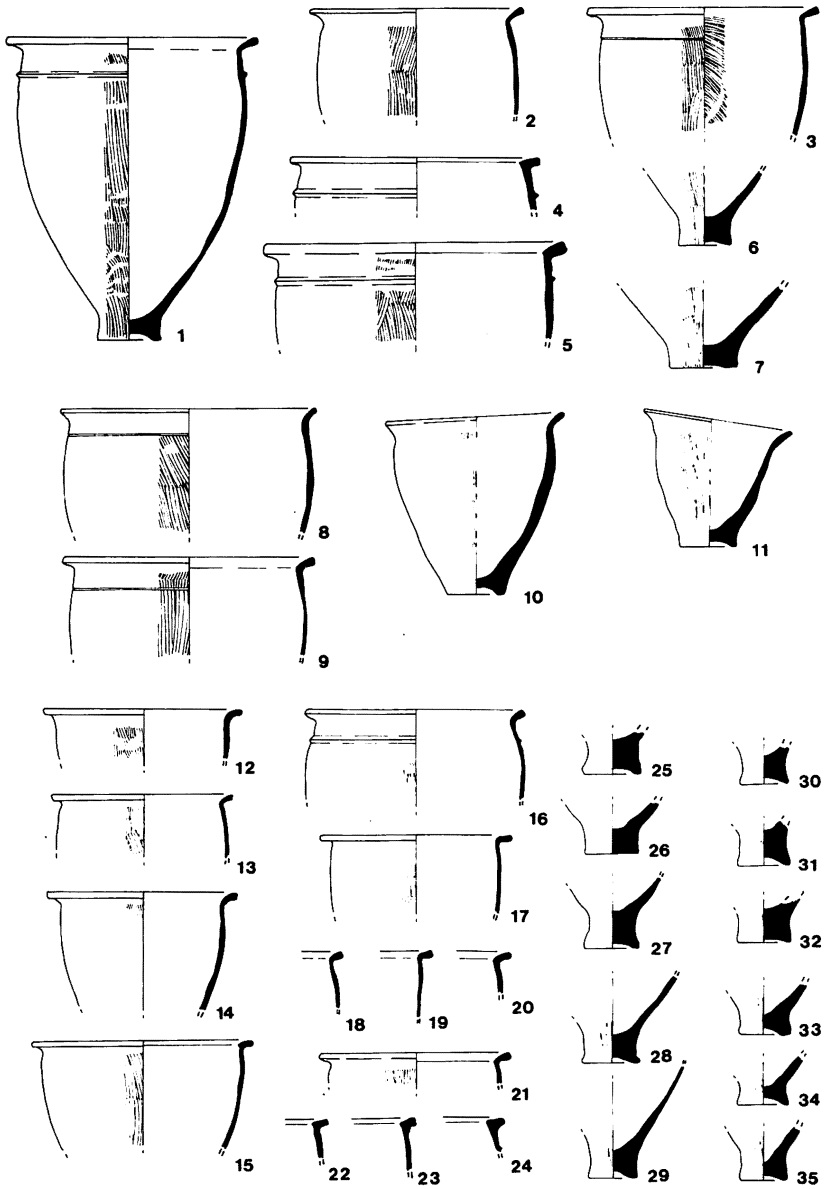
三

本節では、前述したA↪D系譜の型式組列間の時間的な併行関係を検討する。その方法としては小児用甕形土器の資料を基準とするが、系譜の異なる甕形土器が組み合う例は少ないため、袋伏竪穴・竪穴式住居跡出土の資料を援用する。まず、B系譜とC系譜の甕形土器については、春日市門田遺跡門田地区36号甕棺・原遺跡53号甕棺などで、B₄に分類される鋤形口縁がやや内傾して「底部d手法」でつくられたと考えられる甕形土器と、逆L字形に屈折する口縁部をもち胴部がやや張りC₁の範疇で考えられる甕形土器が組み合う例が知られている(第8図1)。筑紫野市平原遺跡1号貯蔵穴・福岡市博多区久保園遺跡2号竪穴式住居跡では、鋤形口縁が外傾するB₆の甕形土器と、「く」字形口縁のC₁・C₂の甕形土器が出土している(第8図4〜15)。前者の例は、C₁とB₄の甕形土器が同時に存在する時間の切片が示され、後者の例ではC₁・C₂とB₆の甕形土器が同時に存在する時間の切片が示されている。また、C₁とB₃の甕形土器と組み合う例は知られていない。したがって、B系譜の甕形土器を基準とするC₁の甕形土器の上限は、B₃と共存しないB₄の甕形土器と併行する時期、下限はB₆の甕形土器のみが存在する時期とすることができる。C₂の甕形土器は、後者の例でB₆と共存すること、B₄・B₅の甕形土器が組み合う例がないことから、上限をB₆の甕形土器のみが存在する時期と考え、C₃とB₆の甕形土器が組み合う例がないことから、C₃の上限はB₆の甕形土器が存在する時期までさかのぼらせて考



第8図 A～D系譜甕形土器の遺構での組合関係 (1)

(1.原K53、2.安永田287区5トレンチK4、3.下稗田K20、4～15.平原1号貯蔵)
 (穴下層、16～21.安永田2号祭祀遺構 22～27.浄泉寺遺跡53号ピット)



第9図 A～D系譜甕形土器の遺構での組合関係
 (1～7.下ノ方24号ピット上層、8～11.下ノ方24号ピット下層、12～35.)
 (馬場山A-4袋状竖穴)

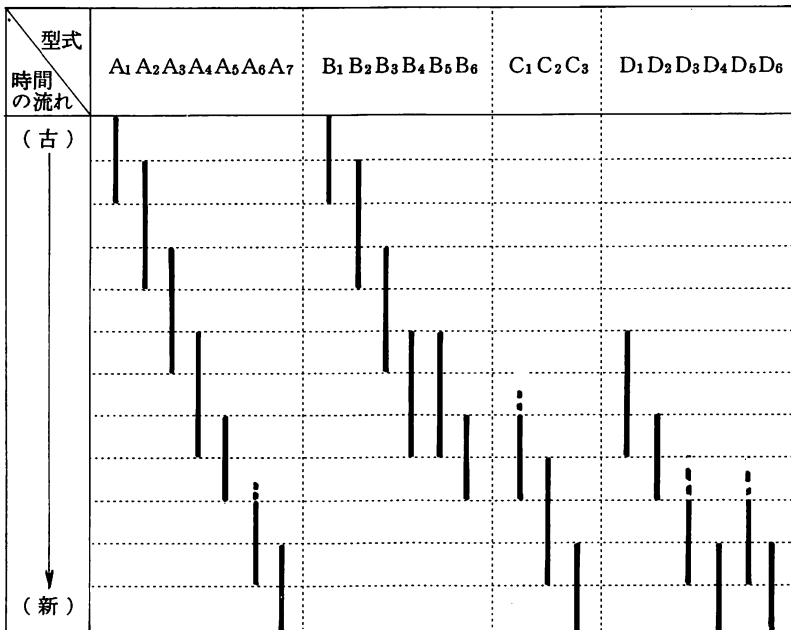
えられない。

次に、A系譜の甕形土器についてみると、北九州市八幡西区馬場山遺跡第2次調査A-4号袋状堅穴出土の甕形土器には、胴部がほとんど張らず口縁部内面にうすい稜をもって屈曲する如意形口縁部破片、やや胴部の張る「く」字形口縁部破片とともに、B系譜の内傾ぎみに粘土を貼付して「コ」字形の口縁部に仕上げた小破片が出土している。底部破片は、「底部a手法」あるいは「底部b手法」でつくられたと考えられる厚めの上げ底であり、 $A_2 \cdot A_3 \cdot B_2 \cdot B_3$ の甕形土器の出土例である(第9図12~35)。また、同遺跡第1次調査33号遺構(袋状堅穴)では $A_2 \cdot B_2 \cdot B_3$ に分類される甕形土器が出土し、飯塚市下ノ方遺跡24号ピット上層出土の甕形土器も $A_2 \cdot A_3 \cdot B_3$ に分類できる(第9図1~7)。これらの資料は、いずれも袋状堅穴に廃棄されたもので、「一括資料」としてはあつかえないが、他の型式が含まれていないことから、 $A_2 \cdot A_3$ の甕形土器は $B_2 \cdot B_3$ の甕形土器とほぼ同時期に存在するものといえよう。このほか、福岡県粕屋郡古賀町東町遺跡の土器溜りでは、 $A_6 \cdot A_7 \cdot C_3$ の甕形土器が、鳥栖市安永田遺跡2号祭祀遺構からは $C_1 \cdot C_2 \cdot A_5 \cdot A_6$ の甕形土器が出土している(第9図16~21)。このうち、 A_7 と C_3 の甕形土器には、弥生時代後期の凸レンズ状底への移行をうかがえる不安定な平底が含まれる。このことから、 A_7 と C_3 の甕形土器の時間的な対応関係が考えられ、前述の東町遺跡・安永田遺跡例とあわせ、 $A_5 \cdot C_2$ の甕形土器との併行関係を考えうる。 A_4 の甕形土器は、他の系譜の甕形土器との伴出関係を知りえなかったが、 $A_4 \sim C$ 系譜内の型式の先後関係から $B_4 \cdot B_5$ の甕形土器とほぼ時間的に対応すると考える。また、 A_1 の甕形土器についても、B系譜の甕形土器と伴って出土する例を知りえた。福岡市早良区浄泉寺遺跡53号ピットでは、 B_1 に分類される甕形土器と、如意形口縁部の破片が出土している。底部破片はいずれも底裾部が外側にふんばるかたちのもので、如意形口縁部の破片にも、この種の底部がつくものと考えられ、 A_1 に分類される甕形土器に復元できる(第8図22~27)。したがって、 A_1 と B_1 の甕形土器併行関係が考えられる。

D系譜の甕形土器については、春日市原遺跡44号甕棺では C_2 と D_2 の甕形土器、鳥栖市安永田遺跡27区5トレンチ4

号甕棺ではB₂とD₂の甕形土器が組み合っている(第8図2)。D系譜の甕形土器は、形状的にB系譜の範疇でとらえられるものを、土器の仕上げ・出土遺構の性格の差から分離したものであり、基本的には両者は形状的に共通している。したがって、前例とあわせ、外傾する鋤形口縁部をもつB₆とD₂の甕形土器を時間的に併行するものと考えてもよい。D₁の甕形土器についても、鋤形口縁部がほぼ水平につくり上げられることから、B₅の甕形土器と対応するものである。また、D₄・D₆の甕形土器が不安定な平底をもち、胴部が張り口径を胴部最大径がうまわまることから、A₇・C₃の甕形土器との対応を考える。D₃・D₅の甕形土器はA₆・C₂との対応を考える。以上、AとD系譜の甕形土器の時間的な対応関係を、B系譜の甕形土器を基準として相対的に整理したのが〈表5〉である。

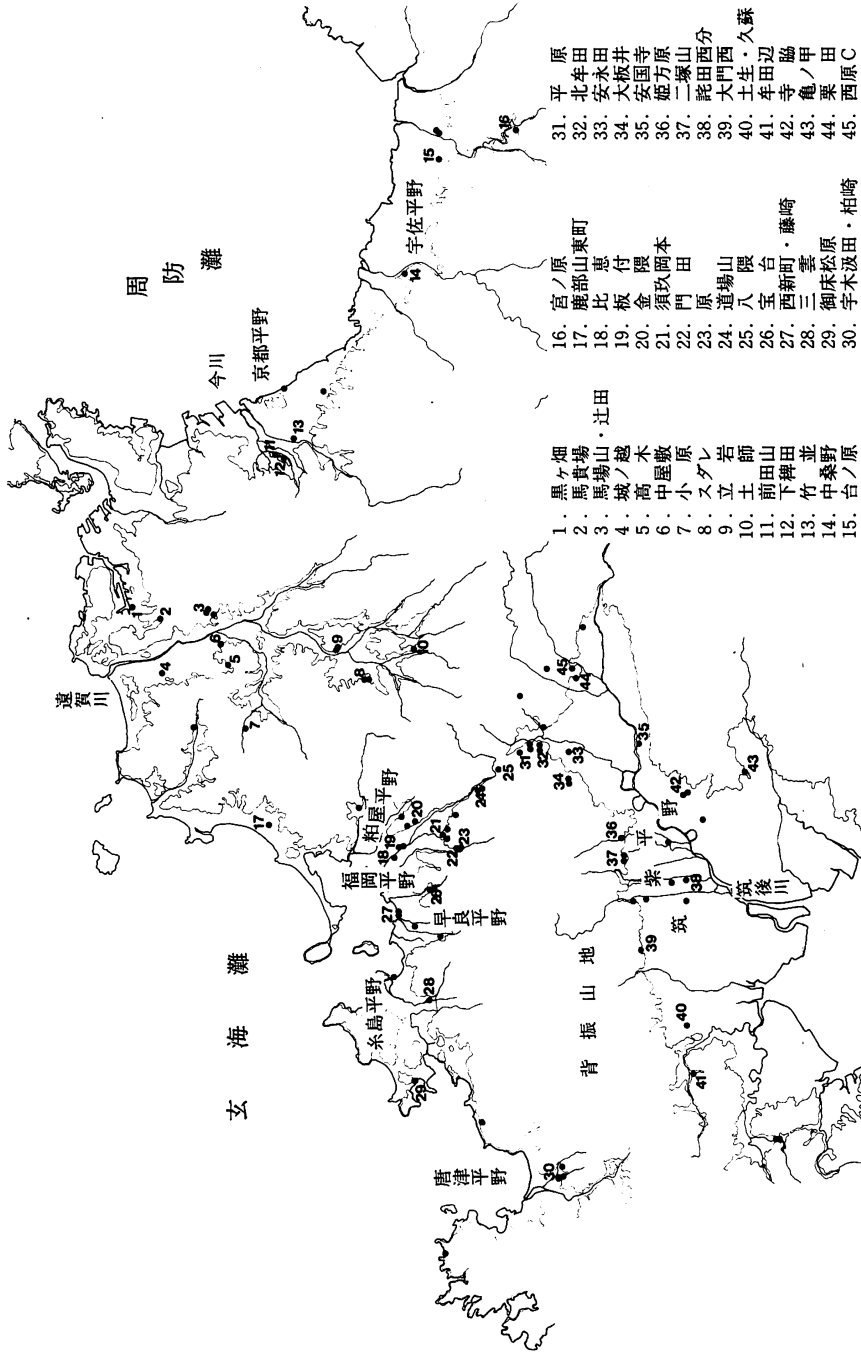
〈表5〉 A～D系譜の甕形土器の時間的な対応関係表



(ただし、各型式の線の長さは時間の長さをあらわしていない。)

次に、各系譜の甕形土器の分布を、ほぼ同時期のものと考えられる型式群ごとにとみると、まず、A₁とB₁の甕形土器は福岡平野以西と筑紫平野に主に分布する。しかし、A₁とB₁の甕形土器は、福岡平野・糸島平野に代表される玄界灘沿岸地域と、筑紫平野に代表される有明海沿岸地域とで出現頻度が異なる。これは、すでに下條信行氏が指摘していることで、玄界灘沿岸地域では、A₁が甕形土器の主体を占め、B₁は全出土土器の数パーセントであるにすぎない。こうした状況は、唐津平野さらに西北九州の沿岸・島嶼地域でも同様であり、佐賀県唐津市柏崎貝塚の貝層出土資料、五島列島福江島の岐宿貝塚出土の資料でもA₁が甕形土器の90パーセント以上を占める。これに対して、有明海沿岸地域では、B₁が甕形土器の主体であり、福岡県八女市亀ノ甲遺跡1号竪穴出土の甕形土器の90%以上はB₁であり、A₁は数パーセントにすぎない。また、筑紫平野西部の佐賀県大門西遺跡、町南遺跡、姫方原遺跡でも同様である。この2地域の境界域に位置する甘木市西原C遺跡・小郡市三沢蓬ヶ浦遺跡では、A系譜のものが40パーセント前後、B系譜のものが60パーセント前後と、ややB系譜の甕形土器の出土量が多い。こうした玄界灘・有明海沿岸地域に対して、遠賀川流域以東の地域では、B₁・A₁の甕形土器はほとんど出土せず、馬場山遺跡A-4袋状竪穴・下ノ方遺跡24号ピット下層でA₂・A₃とともに出土しているような如意形口縁部をもつ甕形土器が、A₁・A₂とほぼ同時期のものとして分布するものと考えられる(第9図2・12・14)。この甕形土器は、胴部がゆるやかにふくらみ、上げ底状の平底あるいは平底がつくもので、これをA₁・B₁の甕形土器と併行するものと考え、前述のA₂・A₃に分類されるスタレ遺跡4号甕棺などに利用される薄めの平底の甕形土器の系譜を理解できよう。この種の甕形土器を便宜的にA₀と呼び、A系譜の甕形土器の型式に追加する。このように、A₀・A₁・B₁の甕形土器は、ほぼ併行する時期に各々、遠賀川流域以東地域・玄界灘沿岸地域・有明海沿岸地域を中心として分布する。

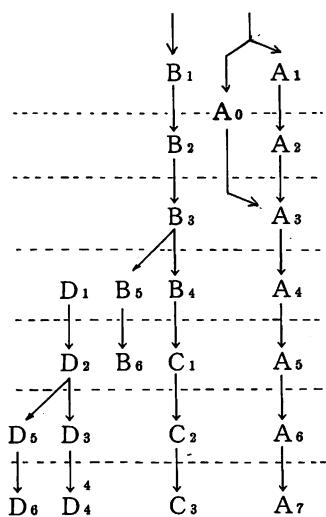
次に、A₂とA₃・B₂とB₃の甕形土器の分布をみると、北部九州地方でも東部の京都平野・宇佐平野では、A系譜のものが全体の90パーセントをこえる。たとえば、行橋市竹並遺跡の袋状竪穴群出土の資料では、90パーセント以上がA₃



の甕形土器で、他はB・B₂・B₃あるいは東部九州地方に分布する「下城式土器」の甕形土器が数パーセントを占める。同市前田山遺跡・筑上郡新吉富村中桑野遺跡でも同様である。また、大分県宇佐市台ノ原遺跡・宇佐郡郡安心院町宮ノ原遺跡ではA系譜の甕形土器が主体であるが、豊前地域でも南半に位置し、東部九州地方と隣接する地理的条件から、「下城式土器」の甕形土器の占める比率が高い。これに対して、遠賀川流域ではA系譜が主体であるが、かなりの量のB系譜の甕形土器がみられる。たとえば、遠賀川下流の福岡県遠賀郡町城ノ越貝塚の昭和29年発掘の資料をみると、A₂とB₂の甕形土器の比率は6対4ないし、7対3、A₃とB₃の場合には7対3ないし、8対2である。北九州市八幡西区馬場山遺跡でも同様にA系譜のものが主体で、B系譜のものが全体の20〜30パーセントを占めている。遠賀川流域でも上流の飯塚市立岩遺跡およびその周辺の袋状竪穴出土の資料でも同様である。しかし、同じ遠賀川流域でも、峠をはさんで筑紫平野と接する嘉穂郡穂波町スタレ遺跡では、B系譜のものが逆に主体を占め、A系譜のものは40パーセント以下である。このような遠賀川流域以東地域に対して、福岡平野以西および筑紫平野の北部九州地方でも西半部の地域では、前段階A₁の甕形土器が主体であった玄界灘沿岸でもB系譜のものが主体となり、有明界沿岸も含めB系譜の甕形土器が100パーセントちかくを占める。このように、A・A₂・A₃とB・B₂・B₃の甕形土器は、遠賀川流域をはさんで、前者がその以東地域、後者が以西地域を中心として分布する。

こうした北部九州地方を二分してA・B系譜の甕形土器が分布する状況は、これ以後安定したものになる。前段階B系譜の甕形土器がかなりの割合で出土する遠賀川流域の諸遺跡でも、A系譜の甕形土器が100パーセントにちかい比率を占める。たとえば、北九州市八幡西区辻田西遺跡・馬責場遺跡1号袋状竪穴では、D₁あるいはD₂の甕形土器の破片が数点出土しているのみで、他はA₄・A₅といったA系譜のもので占められる。鞍手郡若宮町小原遺跡1号貯蔵穴・同郡鞍手町中屋敷遺跡第1地点4号袋状竪穴ではA₆・A₇の甕形土器ばかりで、B・C系譜のものは出土していない。これに対して、福岡平野以西および筑紫平野では、ほぼ100パーセントちかくがB・C系譜の甕形土器で占められる。

このうち、B₆に併行するC₁の甕形土器は、福岡平野から南、脊振山塊の東麓を中心として分布する。B系譜の甕形土器がなくなった後には、B系譜にかわってC系譜のものが、福岡平野以西および筑紫平野地域の甕形土器の主体となる。また、この地域にもA系譜の甕形土器の出土が若干知られている。福岡平野の東に隣接する粕屋平野地区では、鹿部山東町遺跡土器溜りに代表されるように、A₅、A₇の甕形土器が出土しており、むしろA系譜が甕形土器の主流である。さらに、A系譜の甕形土器は玄界灘ぞいに福岡平野・糸島平野・唐津平野に点々と分布している。こうした海沿いの分布とは別に、峠をはさんで遠賀川上流域と接する甘木・朝倉地区さらに脊振山地の東南麓にもA系譜の甕形土器が分布する。しかし、A系譜の甕形土器の出現頻度は、粕屋平野地区をのぞき、他の地区では一遺跡出土の甕形土器の中で多くても数パーセントを占めるにすぎない。こうしたAとC系譜の分布に対して、D系譜の甕形土器は北部九州地方全域に広く分布しているが、その出土量は少ない。A系譜の甕形土器が主体である遠賀川流域以東地域では一遺跡出土の甕形土器の数パーセントにすぎず、福岡平野以西および筑紫平野地域でも同様である。



以上、A₁を除くA系譜の甕形土器は、遠賀川流域以東の北部九州東半部を中心として展開する一列列のものであるといえる。これに対してB・C系譜の甕形土器は北部九州西半部を中心として分布する。このうち、C₁の甕形土器が形状的にB₄にちかく、分布もB₄とほぼ一致することから、C系譜の甕形土器は、同じ「く」字形・L字形に屈折する口縁部をもつA系譜のものとは別に、B系譜の甕形土器から派生するものであるといえる。つまり、この地域では、弥生時代中期のある時期にB系譜からC系譜の内的な系譜の変換がみられる。このように、北部九州地方の弥生時代中期の甕形土器は、〈表5〉をその

併行・系譜関係を次のように概念化することができる。

四

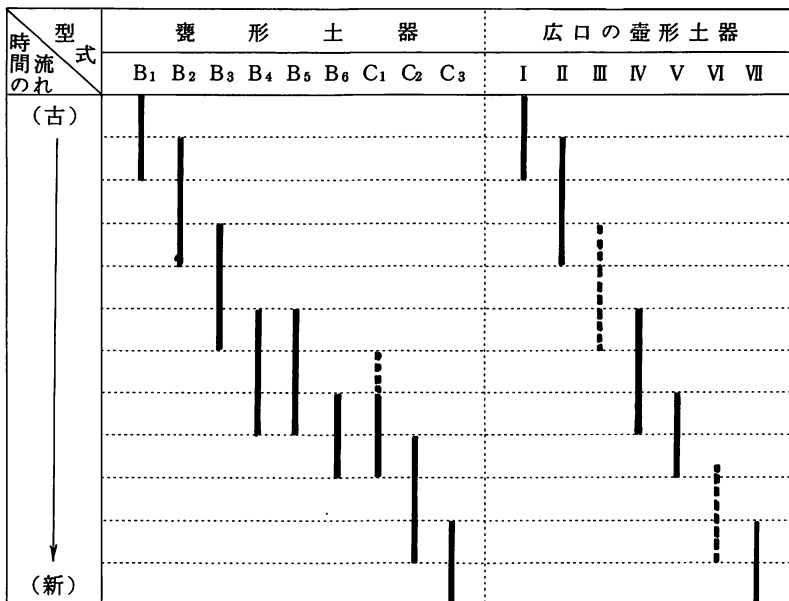
前節まで北部九州地方の弥生時代中期須玖式土器の甕形土器について検討してきたが、「須玖式土器」のもつ一つの代表例とされる朝顔形にひろがる口頸部をもつ広口の壺形土器がある。この種の広口の壺形土器は、口縁部に粘土を貼付して鋤形口縁部につくり上げたものと、そのままひらいたままに仕上げたものがある。両者には他の部位では形状的な差違は認められず、前者には大形品が含まれ、成人用大形甕棺に用いられるといった機能の差違がある程度である。ここでは、後者の鋤形口縁部に仕上げられない広口の壺形土器で、主に福岡平野以西および筑紫平野の北部九州西半部のものを検討の対象とした。

広口の壺形土器は、胴部から頸部へのつながり、胴部形状、口頸部の長さとおろろなどから、第11図1〜4と5〜15に大きく分類できる。前者は球形に近い胴部ゆるやかに口頸部がひらくもので、後者はやや肩の張った胴部に直角に口頸部が接合するものである。さらに、前者は球形の胴部をもち、ゆるやかなカーブで頸部へ移行するもの(1)と、扁球形の胴部に90に近い角度で口頸部が接合されるもの(2〜4)の2グループに細分できる。後者も同様に5グループに細分できる。ナデ肩で口径が胴部最大径とくらべ小さく、口頸部もそれほどびないもの(5)。やや肩のはった胴部に、胴部最大径に等しくひろがる口頸部をもつもの(6〜10)。口径が胴部最大径をうわまわり、口頸部の高さが器高の半分ちかいもの(11〜13)。口径が胴部最大形をうわまわり、口頸部が中央ですばまり、頸部の付け根に段・沈線・凸帯をめぐらす、胴部との境いが不明瞭なもの(14・15)。やや肩の張る胴部に口頸がほぼ垂直に立ち上がるもの(第13図8・9)である。次に、便宜的に、第10図1↓I、2↓4↓II、5↓III、6↓10↓IV、11↓13↓V、

14・15↓VI、第13図8・9↓VIIとして、小児用甕棺などの遺構で前節までに述べた甕形土器とどのような組み合わせているか検討してみた。Iは福岡市早良区浄泉寺遺跡51号ピットで、B₁に分類できる甕形土器と出土している(第11図16・17)。次に、同市博多区板付遺跡G—5a区35号甕棺では、口頸部が打欠かれているが、胴部形状からIIに分類できると考えられる壺形土器がB₂の甕形土器と組み合っている(第11図18)。また、同6号甕棺には、鋤形口縁に仕上げられているが他の特徴はIVの範疇で把握できる広口の壺形土器と、B₃もしくはB₄の甕形土器とが用いられている(第11図19)。同市早良区藤崎遺跡96号甕棺ではIVの広口の壺形土器と、鋤形口縁部をほぼ水平につくるB₅の甕形土器が組み合う(第11図20)。甘木市栗山遺跡10号甕棺では、鋤形口縁部であるがVの範疇で考えられる壺形土器と、B₅に分類できる甕形土器が組み合う(第11図21)。筑紫野市永岡遺跡では、栗山例と同じ

須玖式土器の再検討

〈表6〉 B・C系譜の甕形土器と広口の壺形土器の併行関係



くVの範疇でとらえられる壺形土器と、B₆の甕形土器が組み合う(第11図22)³⁸⁾。そのほか、板付遺跡E-6b井戸、G-5a区10号竪穴(井戸)、久保園遺跡3号竪穴式住居跡では、VIIに分類できる小形品と、C₂・C₃の甕形土器が出土している。³⁹⁾ こうした遺構での組み合せ関係から、B・C系譜の甕形土器を基準として、I↓II↓IV↓V↓VIIという型式変化がたどれる。さらに、III・VIは、形状的に、各々IIとIV・VとVIIの中間的なものであり。この種の広口の壺形土器のI↓II↓III↓IV↓V↓VI↓VIIという型式組列を組み立てられる。また、B・C系譜の甕形土器との時間的な対応関係も、B₁・I↓B₂・II↓B₃・III↓B₄・B₅・B₆・VI↓B₆・C₁・V↓C₂・VI↓C₃・VIIと整理できる(表6)。

さて、この種の広口の壺形土器は、A系譜の甕形土器の分布する遠賀川流域以東の地域にも分布する(第13図10、14)。しかし、前述した北部九州西半部ではみられない広口の壺形土器を中心とする系譜ヴァリエーションが認められる。たとえば、北九州市八幡西区辻田西遺跡A-1袋状竪穴出土の小形品はA₂・A₃の甕形土器ともなうが、胴部の形状から前述のIIに対応するものであるが、口頸部が短く外反度も弱い。行橋市前田山遺跡、同下稗田遺跡、築上郡新吉富村中桑野遺跡などから、前述のV・VIに対応する壺形土器が出土しているが、これらはV・VIとくらべて口頸部はそれほどひろがらず、肩のはった胴部をもち、次第に出土量が多くなっていくようである。(第13図15、19)。また、A₂・A₄の甕形土器には、形状的に弥生時代前期の「高椀式」からの系譜をひくと考えられる広口の壺形土器ともなう(第13図22、25)。さらに、これらの折衷形のものもみられる(第13図20、21)。

このほかの壺形土器も、北部九州地方の東西で系譜の異なるものが分布する。「須玖式土器」の代表例の1つとされる袋状口縁をもつ長頸の壺形土器は、B₆・C₁・C₂の甕形土器にもない、一部、遠賀川上流域の嘉穂郡桂川町土師遺跡で出土例が知られているが、主に福岡平野以西および筑紫平野地域に分布する。⁴⁰⁾ これに対して、遠賀川以東の地域では、A₄・A₇の甕形土器にもなつて、直口縁で口縁部直下に断面三角形突帯をめぐらす長頸の壺形土器が分布する。この2つの長頸の壺形土器は、外面を丹塗り研磨され祭祀的性格の濃い土器であるが、その分布は重複することがほ

とんどない。また、遠賀川流域の以東地域では、扁球形の胴部をもち、ゆるやかにひろがる頸部に鋤形口縁がつく壺形土器、球形にちかい胴部に短く外反する口頸部がつく大形の壺形土器などがある。これらは北部九州地方の西半部で出土することはほとんどなく、前者の壺形土器に形状的にちかい壺形土器があるが、系譜的には広口の壺形土器VI・VIIから派生したものである。

また、高坏形土器は、口縁部を断面鋤形につくることが北部九州地方全域の特色である。しかし、A⁴・A⁵・B⁴・B⁶・C¹ともなう高坏形土器は、福岡平野以西および筑紫平野地域で脚部が細長くのびるものが主流であるのに対して、遠賀川流域以東の地域ではこの種のはほとんどなく、短い脚部をもつものが主体である。器台形土器は北部九州地方内で地域的な差異はみられないが、B⁴・B⁶・C¹・C²ともなう丹塗り磨研された大形の筒形器台は、福岡平野以西および筑紫平野地域に主に分布し、遠賀川流域以東の地域では嘉穂郡桂川町土師遺跡の出土例をのぞき、基本的には分布していない。

このように、弥生時代中期前後には、甕形土器に代表されるように北部九州地方の東西で土器の系譜の異なるものが分布する。これは、土器以外の石器・墓制についてもいえることである。石器に関しては、下條信行氏が指摘するように、遠賀川流域以東の地域では大形石庖丁、石鎌、石戈などは、福岡平野および筑紫平野とは異なる型式や出土量の集中性がみられる。⁴⁾ 墓制については、B・C系譜が甕形土器が主体である福岡平野以西および筑紫平野地域は、成人用大形甕形墓が盛行し、墓制の主体である。これに対して、A系譜が甕形土器の主体である遠賀川流域以東の地域では、土墳墓が墓制の主体である。甕形墓は小児用の墓葬として採用され、成人用大形甕形墓は北部九州西半部と峠をはさんで接する遠賀川上流域のスタレ遺跡・土師遺跡でみられるが、墓制の主体ではない。また、飯塚市立岩遺跡に代表されるように、成人用大形甕形墓群は鏡・青銅武器・鉄製武器の集中する特殊な墓地を形成する。

しかし、一方では、他の地方とくらべ、北部九州地方としての一つのまとまりを示す状況も認められる。石器につ

いていえば、飯塚市立岩遺跡周辺を中心として分布する輝緑凝灰岩製の石庖丁、福岡市今山で産する玄武岩製の太形蛤刃石斧、挟入石斧、扁平片刃石斧、無莖の三角形式磨製石鏃、鉄剣型石剣などの同種・同型式のものが北部九州地方全域に分布する。また、墓制では、墓地は基本的には10基前後の埋葬遺構から構成され、それに対応して墓地内の祭祀遺構が宮まれる⁽⁴⁾。甕棺葬自体も、小児用の墓葬としては他の地方で数量的に多くはなく、北部九州地方の墓制を代表するものである。集落は5軒前後の竪穴式住居跡を基本的な単位で構成されることが、北部九州地方の一般的な姿である。土器に関しても、北部九州地方の東西に共通して、D系譜の甕形土器、広口の壺形土器があり、何よりも粘土を口縁部に貼付して鋤形口縁をつくるものが、甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏形土器の各器種ごとにもられることは、北部九州地方の特色である。また、前述したように東西地域間の甕形土器・壺形土器の一部に差違があるが、そのみで全体の器種が構成されることなく、両地域に共通するものと相互に補充して北部九州地方の中期土器の器種を構成している。そうした意味で、北部九州地方全域で弥生中期土器を「須玖式土器」と呼んでよからう。

ここでは、従来「須玖式土器」を代表する鋤形口縁の一般化、丹塗り磨研の祭祀土器群の盛行を目やすとして、前述のA₅ A₆ B₅ B₆ C₁ C₂ D₂ D₃ D₅の甕形土器とV₁ VIの広口の壺形土器を基準とする土器群を「須玖Ⅱ式土器」、その前段階のものとして、A₂ A₄ B₂ B₄ D₁の甕形土器とⅡ・Ⅳの広口の壺形土器を基準とする土器群を「須玖Ⅰ式土器」とする。また、A₀ A₁ Bの甕形土器、Ⅰの広口の壺形土器を基準とする土器群は、弥生時代前期土器の範疇でとらえられるものであり、C₃ A₇ D₄ D₆の甕形土器とⅦの広口の壺形土器には、弥生時代後期の凸レンズ状底への移動をうかがえる不安定な平底が含まれており、後期土器の範疇でとらえておきたい。「須玖Ⅰ式土器」と「須玖Ⅱ式土器」については、前述してきたようにいくつかの小时間帯に区分が可能である。そこで、「須玖Ⅰ式土器」の中で、A₂ B₂の甕形土器とⅡの広口の壺形土器を基準とする土器群を「古段階」、A₄ B₄ B₅ D₁の甕形土器を基準とする土器群を「中段階」、他を「新段階」とする。また、「須玖Ⅱ式土器」の中で、A₅ B₆ C₁ D₂の甕形土器とV

の広口の壺形土器を基準とする土器群を「古段階」、A・C・Dの甕形土器とVIの広口の壺形土器を基準とする土器群を「新段階」とする。「須玖I式土器古段階」は従来中期初頭とされる「城ノ越式土器」と対応するものである(12・13図)。また、遺構出土土器には、前述してきたように、新・古2者が混在する場合がある。その場合は、当然新しい段階で、その資料の時期比定を行うという編年図の読み方を行う。

また、分布の面で、A系譜の甕形土器に代表され遠賀川流域の以東地域に分布する土器の系譜を「遠賀川以東系」、B・C系譜の甕形土器に代表され福岡平野以西および筑紫平野地域に分布する土器の系譜を「遠賀川以西系」と呼びたい。さらに、本稿ではふれなかったが、B系譜の甕形土器の中には小平野ごとに部分要素の若干の差違が認められる。こうした「遠賀川以西系」の中での小地域ごとの差違を「福岡平野型」などと「○○型」の言葉で考える。

おわりに

本稿は、弥生時代中期土器からみた地域間交流の検討を目的として書き始めたが、時間的制約から、その基礎作業である土器編年でおわってしまった。現在、北部九州地方の土器の編年の研究に欠落しているのは、土器様式を組み立てる考え方と、分布の面とも関連する系譜関係の整理であろう。こうした整理を行う中で、土器の数量的な処理も可能となってこようし、考古学的な現象面からの地域間交流のあり方も具体的ななかたちで分析ができ、その背後にある文化・社会の復元・解釈も可能となろう。本稿の中では、そうした意味で、「く式」、「く段階」、「く系」、「く型」という言葉を用いた。

最後になったが、岡崎敬・横山浩一・小田富士雄・西谷正先生、多くの方々から多くの御指導・教示をたまわり、資料調査の便宜をはかっていただいた。記して感謝いたします。

〔註〕

- (1) 森本六爾・小材行雄編『弥生土器聚成図録』昭和13年
- (2) 森貞次郎「各地域の彌生式文化——北九州——」『日本考古学講座』4 昭和36年、同「弥生文化の発展と地域性——九州——」『日本の考古学』Ⅲ 昭和41年
- (3) 鏡山猛・杉原荘介・渡辺正氣・大塚初重、「福岡県城ノ越遺跡」『日本農耕文化の生成』昭和36年、杉原荘介「北九州地方」『弥生式土器集成』（本編1）昭和39年
- (4) 小田富士雄、「入門講座・弥生土器——九州3——」『考古学ジャーナル』79 昭和48年
- (5) 片岡宏二「弥生時代中期の土器編年について——特に三國丘陵の資料を忠に——」『大板井Ⅱ』昭和57年 小都市教育委員会、同「板付Ⅱ式土器の細分と編年について——特に三國丘陵の資料を中心に——」『三沢逢ヶ浦遺跡』（福岡県文化財調査報告書 第66集 昭和59年）
- (6) 橋口達也「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅳ 昭和54年 福岡県教育委員会
- (7) 長嶺正秀ほか『下稗田遺跡調査概報』Ⅰ 昭和56年、石井龍彦「下稗田遺跡土器編年試案Ⅱ」『下稗田遺跡調査報告』Ⅳ（行橋市文化財調査報告書 第13集）昭和58年、梅崎恵司「第四章 まとめ」『馬貴場遺跡』（北九州市埋蔵文化財調査報告書 第26集）昭和59年
- (8) 甕形土器には、他に器高20センチメートル前後の小形品、器高60センチメートルをこえる大形府がある。
- (9) 長嶺正秀ほか『前田山遺跡調査概報』Ⅰ 昭和52年、行橋市前田山遺跡調査会「福岡県行橋市前田山遺跡の調査」『考古学ジャーナル』昭和53年、また、概報掲載の資料のほかに、未発表の資料を一部使用させていただいた。
- (10) 橋口達也編『スタレ遺跡』（穂波町文化財調査報告書 第1集）昭和51年、浜田信也編『八木山バイパス関係埋蔵文化財調査報告』昭和58年 福岡県教育委員会
- (11) 酒井仁夫編『日上遺跡』（福岡県文化財調査報告書 第48集 昭和46年）
- (12) 長嶺正秀ほか『下稗田遺跡調査概報Ⅰ』（行橋市文化財調査報告書 第9集）昭和55年、同『下稗田遺跡調査概報Ⅱ』（行橋市文化財調査報告書 第10集）昭和56年、同『下稗田遺跡調査概報Ⅲ』（行橋市文化財調査報告書 第11集）昭和57年、同『下稗田遺跡調査概報Ⅳ』（行橋市文化財調査報告書 第13集）昭和58年
- (13) 小田富士雄編『馬場山遺跡』昭和53年北九州市埋蔵文化財調査会、栗山伸司編『馬場山遺跡』（北九州文化財調査報告

第36集) 昭和55年

(14) 岡崎敬編、『立岩遺蹟』 昭和52年 福岡県飯塚市立岩遺跡調査委員会

(15) 梅崎恵司、『馬責場遺跡』(北九州市埋蔵文化財調査報告書 第26集) 昭和59年、上野精志編、『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅷ 昭和54年 福岡県教育委員会・児玉真一編、『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅺ 昭和52年 福岡県教育委員会

(16) 山口讓治編、『板付周辺遺跡調査報告書』(3) (福岡市埋蔵文化財調査報告書 第36集) 昭和51年

(17) 山田正編、『安永田遺跡本調査第1年次概要報告書』(鳥栖市文化財調査報告書 第13集) 昭和57年、山田正編、『安永田遺跡本調査第2次概要報告』(鳥栖市文化財調査報告書 第15集) 昭和57年、石橋新次編、『安永田遺跡——袖比遺跡群範圍確認調査報告書——』(鳥栖市文化財調査報告書 第16集) 昭和58年

(18) 丸山康晴編、『赤井手遺跡』(春日市文化財調査報告書 第6集) 昭和55年

(19) 折尾字ほか編、『西新町遺跡』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第79集) 昭和57年

(20) 佐々木隆彦編、『栗山遺跡』(甘木市文化財調査報告書 第12集) 昭和57年

(21) 木下修編、『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第10集、昭和54年、福岡県教育委員会

(22) 三島格ほか、『浄泉寺遺跡』 昭和49年 東洋開発株式会社

(23) 丸山康晴編、『赤井手遺跡』(春日市文化財調査報告書 第6集) 昭和55年

(24) 注(17)・(21) 文献および、柳田康雄編、『国道200号線バイパス関係埋蔵文化財調査概報』(福岡県文化財調査報告書 第67集) 昭和59年

(25) 注(24) 文献および、力武卓治ほか、『久保園遺跡』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第91集) 昭和58年

(26) 注(13) 文献および、嶋田光一、『ノノ方遺跡』(飯塚市文化財調査報告書 第6集) 昭和57年

(27) 注(17) 文献および、高倉洋彰編、『鹿部山遺跡』 昭和48年 日本住宅公団

(28) 九州大学文学部考古学研究室所蔵

(29) 九州大学文学部考古学研究室所蔵

(30) 多々良友博編、『姫方原遺跡—F地区—』 昭和56年、中野建設・中野ハウジング、佐賀県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』 昭和55年

須玖式土器の再検討

- (31) 中間研志編 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告3』 昭和59年 福岡県教育委員会、宮小路賀宏編 『三沢蓬ヶ浦遺跡』(福岡県文化財調査報告書 第66集) 昭和59年
- (32) 注(26) 文献と同じ
- (33) 福岡県行橋市竹並遺跡調査会場 『竹並遺跡』 昭和54年
- (34) 注(9) 文献および、馬田弘稔編 『中桑野遺跡』(新吉富村文化財調査報告書 第3集) 昭和53年
- (35) 後藤宗俊・清水宗昭・真野和夫編 『台ノ原遺跡』(大分県文化財調査報告 第33輯) 昭和50年
- (36) 九州大学文学部考古学研究室所蔵
- (37) 浜石哲也編 『高速鉄道関係埋蔵文化財報告書 第62集』 昭和55年
- (38) 浜田信也編 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』 第5集 昭和52年 福岡県教育委員会
- (39) 山崎純男編 『板付周辺遺跡調査報告書(5)』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第49集) 昭和52年 および、注(16)・(25) 文献
- (40) 長谷川清之編 『土師地区遺跡群』I (桂川町文化財調査報告書 第1集) 昭和57年
- (41) 下條信行 「九州における大陸系磨製石器の生成と展開」『史淵』 第114輯 昭和52年
- (42) 田崎博之 「北部九州の集落」『季刊考古学』 6 昭和59年